

「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」受賞作品制作レポート

「音の日」を終えて

名古屋芸術大学 音楽学部 4年

福井 楓葉

1. はじめに

この度、「学生の制作する録音作品コンテスト」にて、優秀音楽作品賞を受賞させていただきました。このコンテストに応募したのは今回で2回目となり、自分の作品が評価されることを目標に勉学に励んでいたため、大学生最後の年にこのような素晴らしい賞をいただくことができ、大変光栄に思っております。私は大学で、レコーディングやPA/SRについて深く学ぶことができました。そこでサラウンドについて興味を持ち、サラウンド作品を制作したいという気持ちが今回の作品制作へと繋がりました。また、オーボエを中学時代から続けて大学でも勉強しており、自分の経験を最大限生かすためにクラシックの音楽作品制作を行いました。

2. 応募作品について

今回応募した作品は、フランク・マルティン作曲の「フルートとピアノのためのバラード」です。この曲はフルートとピアノのみの曲で、フルートのソロ作品として有名な作品です。

演奏は名古屋芸術大学音楽学部4年生のフルート専攻生 豊永要吉さんと、ピアノは本学の助手、秀平雄二さんにご協力いただきました。

曲のタイトルに「バラード」とあるように、歌曲のようななめらかで妖艶な旋律と、フルートならではのリズムカルなパッセージが特徴的で、その対比を表現するためには5ch以上必要だと考え、サラウンドでのセッションレコーディングを企画しました。

3. 録音および機材について

●録音会場

・名古屋芸術大学 東キャンパス 3号館ホール

●録音機材

- ・ DAW Pro Tools Native ver.10
- ・ Audio I/F RME MADifaceXT
- ・ HA/ADC RME Micstasy
 RME Octamic XTC
- ・ Monitor GENELEC 8020B

表 1. MIC Input list

1	Main1 L	DPA4006
2	Main1 R	DPA4006
3	Main2 L	DPA4011
4	Main2 R	DPA4011
5	Room L	Schoeps MK2S
6	Room R	Schoeps MK2S
7	Fl SpotL	Schoeps MK4
8	Fl SpotR	Schoeps MK4
9	Piano SpotL	Schoeps MK4
10	Piano SpotR	Schoeps MK4



写真 1. メインマイクの様子



写真 2. スポットマイクの様子

今回、メインマイクには通常的全指向性マイクを用いた AB 方式ではなく、名古屋芸術大学の公開講座として行われた、トーンマイスターワークショップにてドイツのトーンマイスターにご教授いただいた、「Straus-Paket」という左右それぞれに全指向性マイクと単一指向性マイクを同軸で配置するという方式を用いました。DPA4006 の全指向性の直接音と間接音の混ざった幅広い音に、直接音の多い単一指向性の DPA4011 の音を効果的にミックスすることで距離感を調節することができます。また利点として狙う位置が同じなのでコムフィルタリングが起きにくいということがあります。

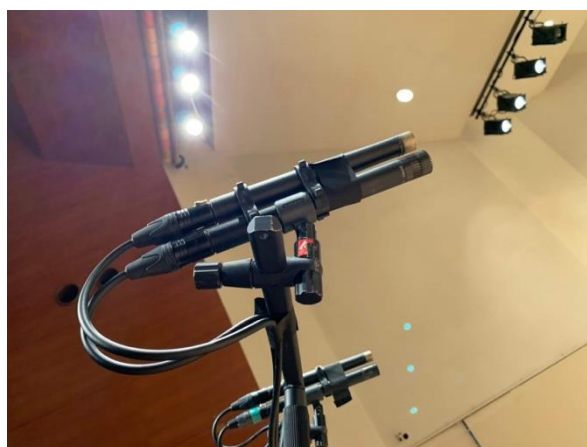


写真 3. メインマイク Straus-Paket の様子

また、スポットマイクはメインマイクの味付けのように使用することを考えており、アタックやダイナミクスを明瞭に収音できるようにセッティングしました。収音の際に注意したことは、会場の響きを理想的なものにするため、空調の設定やドアの開閉に注意し、適度に休憩を挟んだりなどしてプレイヤーが演奏に専念できるように配慮しました。

写真4のように、ホールの舞台裏にて機材をセッティングしてモニターをしていたのですが、そこで音が響いてしまわないようにスピーカーの裏には壁と毛布で反響を防ぎ、スタジオのようなモニター環境の構築を目指しました。



写真4. モニター環境の様子

4. ミキシング環境

●ミキシング機材

- ・ DAW Pro Tools HD ver.10
- ・ Audio I/F digidesign 192 I/O
- ・ Monitor GENELEC 1030

5. 自己総評

このフランク・マルティンは歌曲を作曲することを得意としており、多くの美しい旋律が印象的なのですが、この曲にはフルートならではのリズムカルなパッセージも含まれています。その中には超絶技巧のようなパッセージもあれば、旋律的な、歌のようなパッセージも存在します。そのすべてを表現しなければならないと考えた時に、「Straus-Paket」というメインマイク方式を用いたことによって、作品の幅を大きく広げることができました。全指向性の DPA 4006 を多くミックスすると、空間を有効活用できる広い音楽が表現できます。これは美しくゆったりとしたメロディに多く活用しました。それに対して DPA 4011 を多くミックスすると、パッセージのリズム感、そして躍動感が明瞭に表現することができます。メインマイクとスポットマイクのみでは表現しきれない立体感を感じることができました。

そして、ルームマイクはサラウンドミックスする際に Ls/Rs として使用しました。そのため、ホールの反響音を収音することを目的に MK2S を音源からメインマイクと比べて約 4 メートル遠ざけて設置しました。しかし、収録した音を聴くとそれほど反響音が入っておらず、直接音の方が多く収音されていたため、壁や床、音源に近すぎたのではないかと思います。その場で確認し、すぐにマイキングを修正できれば良かったのですが、その時には判断できず、ミックスの際に気付くこととなりました。改善策としましては、ミックスの際にリバーブを不自然にならない程度に多めに混ぜて使用しました。主観ばかりにならず、客観視することの大切さを改めて学びました。今回のルームマイクの目的としてはホールの広い空間に反射した間接音を収録することが目的でしたが、音源に向けてマイキングをしてしまったためはっきりし音

が収録できてしまったということなので、より広い空間、マイクを天井や客席に向けることで空間の音を収録できるのではないかと考えました。

その他に、メインマイク DPA 4006 をフルートに向けすぎてしまったという反省点があります。DPA 4006 の指向特性として、全指向性ではありますが、音源にマイクの先を向けると 10kHz 辺りが持ち上がるという特性があります。つまり、今回はフルートの 10kHz が持ち上がってしまい、ミックスする際に調節することに苦労しました。これらも、自身が客観視できていないことを再確認する機会となりました。

6. コンテストを終えて

このコンテストに向けて、今までで一番自分の作品と向き合いました。何度も聴いて、何度もミックスをして、やっと出来上がった作品でした。この経験を通して私が感じたことは、「何が正しいのかよりも、自分が何を伝えたいかが大切である」ということです。他の受賞者さまの話を通じて聞いて、コンセプトがしっかりしており、作品を通してリスナーに伝えたいことが明確に伝わってきました。だからこそ、多くの方の心に伝わり、受賞されたのだと思います。

今回は、このような機会をいただけたことで、良い音楽を良い形で、皆さまに伝えられたことをとても嬉しく思っています。これからも、芸術作品を楽しむ一人の消費者として、また、作品を作り上げる一人の生産者として、様々な事柄に挑戦していきます。素晴らしい機会と、経験をありがとうございました。

執筆者プロフィール

福井 楓葉 (ふくい ふうか)

1997年 愛知県生まれ

小学生の頃より音楽に興味を持ち吹奏楽部に入部

中学・高校ではオーボエを担当

名古屋芸術大学ではレコーディング、PA/SRについて学ぶ

名古屋芸術大学 音楽学部 音楽文化創造学科

サウンド・メディアコース 2020年度卒業見込み

